

守護霊と生きる感覚とその先にあるものとは—シャマン（ブォ）の日常実践から

サランゴワ

キーワード：守護霊、感覚、共感、多元感覚、多元多重感覚、食、生前の記憶、痛み、供犠羊

はじめに

シャマンが他の宗教職能者と比べて端的な特徴は、シャマンにした霊界の守護霊という存在がいて、その存在と直接交流・交信することにある。守護霊は肉体を持たないため、シャマンの身体に憑依し、共生することもある。この意味で、シャマンの身体は、守護霊の身体であり、守護霊の感覚や記憶がシャマンの身体を通して生きる。

本論では、身体を守護霊と生きるシャマンの日常実践を取り上げて、それが守護霊とシャマンにとってどのような意味があるかを見تينことにする。視点と分析の方法論は、多元感覚人類学であるが、本論では多元多重感覚の視点をを用いる。その理由は、守護霊と生きるシャマンが、自分の感覚に加えて、守護霊および守護霊に与えられたクライアントや動植物に関する感覚を幾重にも体现するという特異性を示しているからである。すなわち、宮坂の「総合的全体的感覚経験の多様なかたちの把握」を試みる〔宮坂 2019 : 174〕。

感覚人類学のこのような新たな展開を踏まえて、本稿では、主に、中国内モンゴルの東部ホルチン地方の通遼市 Y 村に住むシャマン春光¹（1978 年生、農民、女性）の日常実践において、いかに多元感覚が働いているかに注目する。シャマンの感覚経験をより細かく、深く引き出すことを目指す。筆者が春光シャマンと初めて会ったのは、2006 年 8 月である。当時、彼女は弟子入りしており、2008 年に守護霊が口を開いて、一人前のシャマンになった。シャマンにした守護霊は、婚家の数代前のシャマンだった男性先祖で、この男性は、寅年生まれで、戌年に没したが、享年は教えられなかった。

1. シャマンの味覚に見る守護霊の生前の食と味覚に関する記憶・感覚

ホルチン地方では、伝統的な食べ物である乳製品が日常的に食べられているが、主食は基本的に米と小麦粉になっている。また、粟、黍、玉蜀黍、コーリャン、そば、大豆や小豆を含む豆類など雑穀も食べられる。守護霊がシャマンの身体に憑依すると、守護霊と一つの身体を生きるシャマンの食は生身としての自分の好き嫌いの他、守護霊が食べてはいけないとした食べ物を避ける。また、シャマンが食べたがるものが守護霊の生前の食事や好物と関係があることもある。さらに、守護霊の属性に

¹ 本稿で人名をすべて仮名とする。年齢を現地の習慣に基づいて、数え年で記録する。

よって好み異なる。例えば、動物（狐、鼬、蛇など）の精霊を守護霊とするシャマンの場合は、人によって、シャマンになる以前と比べて、肉をより食べたがる現象が見られる。それは、守護霊は肉食動物のためと言われる。春光シャマンは、他のシャマンが守護霊に毛を取り除かれた鶏を生のまま祭壇に捧げているのを見て、吐き気がしたという。これを受けて、自分の守護霊は、亡きシャマンの霊なので、動物の守護霊のように生ものを好むではなく、火を通した食べ物を好むのだと分かったという。つまり、その吐気は、守護霊の感覚であり、春光の身体を通して表出されたことになる。次に、春光の経験を取り上げる。

① 黒粘土一舌が曲がらなくなるまで食べた

ホルチン地方の田舎では、少し前までは、子供や大人が、特に妊婦が黒粘土を食べることを好む人がいた。黒粘土は、川の畔や沼地から出る。今も妊婦によって、黒粘土を食べたがる人がある。2002年に来日していた筆者の友人（1970年代生）が妊娠した際に、子供の時に食べていた黒粘土を食べたがったので、その主人が黒粘土を取りに帰国したと聞いたことがある。春光は、時に黒粘土をひどく食べたがるそうである。そのことを次のように説明した。「妊娠していないのに、食べたくなるのは、守護霊が生前食べていたからである。そして、真っ黒の土なのに、全く違和感がなく、思いのまま舌が曲がらなくなるまで美味しく食べた。まるで林檎を食べているように美味しく感じた。そして、満足感に満たされた」。

【分析】

春光シャマンがこの話を語り聞かせてくれた時に、次のポイントを挙げている。①妊娠していないのに食べたくなる、②真っ黒でも違和感が全くなく、③思いのまま食べる、④満足感に満たされる。妊婦は普段食べないものを食べたがるが見られる。春光から見れば、自分のこの感覚は明らかに守護霊に由来するものである。思いのまま舌が曲がらなくなるまで食べたことからその欲求はいかに強烈かが感じ取れる。守護霊と肉体を共に生きる春光シャマンは、守護霊の黒粘土を食べたがっている欲求をそのまま感じ、思い存分食べた。守護霊によって与えられた多重感覚である。

② 榆の内樹皮の粉を入れた玉蜀黍の餡餡麺

餡餡（へろ）麺とは、中国北方の麺食の一種で、豆粉、小麦粉、蕎麦粉、玉蜀黍粉、コーリャン粉などで作られる。ホルチン地方では、麺を省いて、餡餡、あるいは、餡餡湯と呼ばれ、主に蕎麦粉、玉蜀黍粉、あるいは、蕎麦粉と小麦粉、または、玉蜀黍粉と蕎麦粉を混ぜ合わせて捏ね、それを餡餡床子と呼ばれる押し出し器具に入れて、湧いている湯に押出す。茹で上がった麺をスープに入れて食べる。餡餡床子は、2000年前後までは、主に木製であったが、今は、金属やプラスチックの手軽なものが普及している。

榆の内樹皮をホルチン地方でドルスと呼ぶ。春から夏にかけて、榆の内樹皮を砕いて、主に蕎麦粉や玉蜀黍粉に入れて、餡餡を作ることがある。ドルスを入れると、美味しさが増すだけでなく、粘弾

性が増し、食感がよくなる。春光は語る。「ドルス入りの玉蜀黍粉で作った飴餠を食べたくて、心の病気に罹ったかのようになった。守護霊が生前食べていたという。食べたくて、食べたくて、愛し合っている恋人と離れて10年になって、会いたがっているような気持ちに喩えることができる。玉蜀黍粉にドルスを入れた飴餠のスープを音を立てて美味しく食べているという夢まで見るのがしばしばある。村外の野原で枯れてしまっている楡を見つけて、『すみません、内樹皮を食べさせてください』と楡に挨拶して、取ってきて、乾かして、砕いて粉にして、玉蜀黍粉に入れて捏ねって、玉蜀黍の飴餠を作ってたっぷり食べた。シュルル、シュルルとすると一碗、シュルル、シュルルとするともう一碗、こうして何碗も食べた」。

【分析】

守護霊が食べたがっている気持ちを春光がそのまま体現している。春光は、楡の内樹皮を入れた飴餠麺をいかに食べたがっていたかを、それを食べている夢まで見ていることから伺える。しかも、食べたがっている気持ちを10年も離れている恋人と会いたがっている気持ちに喩えた。いかに美味しく早く食べたかを「シュルル、シュルル」と表現した。食べたがっていた時の感覚と食べた時の感覚が春光の表現によって、こちらへ生き生きと伝わってくる。

これは守護霊から与えられた、味を通した多元多重感覚である。

次の写真は通遼市ジャード旗G町の農家が飴餠を作っている様子である。



図1 飴餠床子に入れて押し出すために、蕎麦粉と玉蜀黍粉を練り合わせて、円筒形にしている。

図2 飴餠床子に入れて沸騰した湯に押し出して、飴餠麺を作る。

図3 子供が作り方を見習っている。

図4 出来上がった飴餠を食べている。

③ ジョガ（楡の若い果実）入りそば拉拉湯（ララタン）

ホルチン地方で、拉拉湯、あるいは、疙瘩湯（ガーダータン）と呼ばれる食べものがある。それは、小麦粉や蕎麦粉、あるいは玉蜀黍粉を捏ね、小さめに指でちぎって、沸騰したスープに入れて作

るものである。春光は、ジョガ入りの蕎麦粉でできた拉拉湯を食べたくて、ジョガが食べごろになる時期を待ちに待った。ジョガとは、榆の緑のままの若い果実のことで、ホルチン地方で5月になると、そのまま生で食べる、あるいは、蕎麦、饅頭、拉拉湯に入れて食べる。春光は、ジョガが食べられる時期になった時、1週間続けて毎日食べて、飽きてきたので食べるのを止めたという。

【分析】

守護霊が、生前食べていたジョガ入り蕎麦拉拉湯を春光の身体を使って、満足できるまでたっぷり食べ続けた。守護霊は生前の食べ物を食べているが、味の感覚は、生前から今へと続いている。

④ トール（アオイ科の多年生植物）という野草入り拉拉湯

春光は、次のように語る。

トールを入れた拉拉湯を食べたくなったので、作って食べた。2020年の秋、トールをたくさん乾燥させて保存した。そして、ときどき、トールを入れた小麦粉の拉拉湯を作って、自分1人で食べる。普段食べないもののため、家族は食べない。守護霊によると、生前、トール入りの拉拉湯を思いのまま食べられなかったという。夏になるとトールはあるが、蕎麦粉、玉蜀黍粉などが現在のほどなかったという。守護霊は生前、物が足りない時代に生きていたので、飢えが分かる。そのため、次のように頼まれた。「クライアントや訪ねて来た人にお茶と食事を出しなさい。現在は、昔と違って、ものが溢れ、豊かになったので、良く款待しなさい。」守護霊に言われた通り、家にやって来た人にやさしく接し、款待している。

【分析】

地方によって、野原や庭、あるいは、道路脇にトールと呼ばれる野草が生える。中国語で「円葉錦葵」と呼ばれ、漢方薬の一種である。秋の温度が氷点下になるまで緑のまま成長し続ける植物である。かつての野菜不足時代に、春になると家庭によって、トールを取ってきて、麺類に入れて食べる習慣があった。春光の家庭ではトールを食べないが、守護霊が生前食べていたので、食べたがった。しかも乾燥させて新鮮なトールが取れない季節でも食べられるようにした。守護霊が相当好きだったと思われる。こうして、守護霊のトール入り料理を食べたがる欲求が満足させられている。ホルチン地方のことわざで、「自分は痛み苦しんだ経験から他者の苦しみが分かる」と言う。春光は、守護霊の生前の飢えの感覚を、自ら経験した異常な欲求と守護霊の教示によって体験した。この多元多重経験が、守護霊の教えを実行する動機付けとなっている。

⑤ アルバイ（^{いぬひめ}犬薔）

春光は語る。

アルバイを食べたくなったので、たくさん取ってきて茹でて、水を切って、両掌で丸くし小分けして、冷蔵庫に保存して、数日間続けて塩水に漬けて食べた。主人が中毒するのではないかと心配した。村人は、茹でたアルバイに味噌をつけて食べるが、守護霊が生前、塩水につけて食べていたので、

そのように食べるのが好きである。

【分析】

アルバイは、前出のトールと同じように、野原、庭、道路脇によく見かける植物である。ホルチン地方で、昔から、アルバイの葉を食べる習慣がある。現在、アルバイの葉を蕎麦、饅頭のスープに入るや牛乳に入れて煮て食べる、あるいは、軽く湯がいて、味噌をつけて食べる人がいる。春光シャマンの守護霊が生きていた時に、味噌を食べる習慣がまだなく、食べたことがないので、アルバイを茹でて塩水につけて食べていた。春光本人が食べる場合、味噌をつけて食べるが、守護霊が食べたがっている、守護霊の生前の習慣に従って、塩水につけて食べた。春光のその際の感覚は、味噌をつけて食べるより、塩水に漬けて食べたかったと説明した。春光の口を使って、守護霊は生前の味を味わった。春光にとっては守護霊の味を優先した多元感覚である。食卓に上った食べ物を食べている主体は人ではなく、霊である。

⑥ ターナ（口語 taan/文語 tagana）とミンガル（menger/minggar）と呼ばれる野草を食べた

ターナ（野生ニラ）とミンガル（野生ネギ）は、昔からよく食べられた野草である。『元朝秘史』にチンギス・ハンが子供の時に食べていた野菜として登場する。春光は語る。「ターナとミンガルは、子供の時、実家の周辺の野原に自生していた。現在見られなくなった。今住んでいる村（実家から東南へ 15 km 離れている）の周辺では生えていない。食べなくなったので、人に頼んで探していたら、トゥシイェト（内モンゴル・ヒンガン盟ホルチン右翼中旗の別名）にあると聞いて、送ってもらった。そして、切って、塩水につけて食べた。」「味噌ではなく、塩水につけて食べたのですか」と筆者が確かめると、「はい、守護霊が生きていた時、味噌はまだなかったそうで、ターナとミンガルを塩水につけて食べていたそうである」と答えてくれた。確かに、味噌は、漢民族の影響によって、食べられるようになった食べ物である。現在は、一般的で食卓に欠かせない。野生のターナとミンガルは現在では、餃子やまんじゅうの具や麺に入れることがある。春光の守護霊は、生前の味に従ってターナとミンガルを塩水につけて食べた。生前の味の再現である。守護霊の生前の味覚に沿った食べ方である。野草のあれこれ

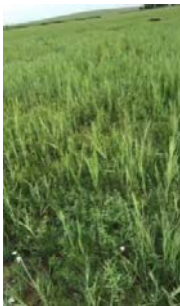


図5 夏の草原、図6 ターナ、図7、図8 トール、図9 アルバイ。
(撮影 図5、6、7 牧民であるシャマン・バドマ)

⑦ 味噌が好き

先述のように、春光の守護霊は、ターナ、ミンガル、トールなどの野草を食べるとき、生前の食べ方で、塩水につけて食べた。生前、味噌を食べたことがないので、味噌好きではないということではなく、実は、味噌が大好きだそうである。生前食べたことはないが、春光の口を通じて食べて、気に入ったそうである。春光本人と家族は、味噌はそれほど好きではなく、毎年 2.5 kg 大豆味噌を作ると、1 年間足りる。2021 年春、春光が味噌を作って、まだ発酵させている途中なのに、非常に食べたくなった。碗ですくって飲みたい²気持ちにまでなった。そのとき、「まだ熟成していない、食べられるようになったらたっぷり食べる」と守護霊に言い聞かせた。「妊娠していないのに、このように味噌をたまらないほど食べたくなるのは、守護霊が食べたがっているからである」と春光は説明した。

【分析】

ホルチン地方でも、妊婦が普段食べない食べ物や、特定の食べ物を無性に欲すると言う。そのため、春光には、自分が妊娠していないのにその症状が出ている。それは、守護霊が非常に食べたがっているからであると説明している。春光本人は味噌をそれ程で好きではないのに、待ってられないほど、さらに碗ですくって飲むほど食べたがった。この感覚を受けて、これは守護霊が食べたがっていると分かったので、春光は味噌が食べられるようになるまで待つよう守護霊に言い聞かせた。自分と守護霊の感覚をはっきりと分けて、対応している。

⑧ モンゴル・バダーとジャリム



図 10 モンゴル・バダー（筆者撮影）

春光は次のような話をする。

モンゴル・バダー（モンゴル＝黍の一種、バダー＝その煎り米）を作るために、モンゴルを煮て煎り、臼で碾くと、黍特有の香りがするだろう。ある日、その香りが鼻に入って、モンゴル・バダーとジャリム（粟、大豆、玉蜀黍などを煎って作った荒粉）が目に入った。そこで牛乳に混ぜてたっぷり食べた。

【分析】

ホルチン地方で、モンゴル・バダーとジャリムはそれぞれ現在のように米と小麦粉が主食になる前の主食の一種だった。モンゴル・バダーをまた、モンゴル・アム（＝穀物転じて主食）、あるいはホレー（煎った）・バダーと言う。ホルチン地方の農村には、1990 年代まで村ごとにロバで引かせる石臼

² 出来上がったばかりの味噌は飲めるほど液体状である。

があった。守護霊は生前モンゴル・バダーとジャリムを日常的に食べていたと思われる。それは家ごとに作られていた。黍を煮て煎り、臼で碾くと、黍特有の香りがする。その香りを春光が嗅いだということである。それを春光は、守護霊が食べたがっているので、春光に嗅がせたと認識している。よって、食欲が増したことに違いない。そして、たっぷり食べたのは、守護霊のためでもある。守護霊に与えられた臭覚であり、食べて、味覚で満足感を得た多元、多重感覚が働いている。

⑨ 手巻きタバコ

春光が述べる。

数年前の秋、村の露天市場に行ったとき、乾燥したタバコの葉がそのまま販売されていた。それを見て、口からたくさん煙を出して吸いたいという気持ちが湧き、精神がおかしくなっているのではないかと自省したが、吸いたい気持ちがますます強くなったので味見したいと少しもらった。帰宅後、タバコを庭の玉蜀黍の薄皮（内苞葉）で巻いて吸いたいという気持ちになった。そして、本当にそのように巻いてたっぷり嗜んだ。それ以降再びタバコを吸いたくはなっていない。

タバコを紙ではなく、玉蜀黍の薄皮で嗜んだ理由について、次のように説明する。祖父（健在なら100歳前後）の時代では、ヨモギの葉にタバコを包んで吸っていたと聞いた。昔は紙より植物の葉が入手しやすかったと思う。守護霊によると、生前、収穫後のモンゴル（黍の一種）の茎を砕いて巻いて吸っていたという。

春光はさらに説明する。

守護霊が降臨してトランス状態になると、家族やクライアントから捧げられた、紙で巻いたタバコを丸ごと噛んで食べているのに、まるで煙を飲み込んでいるような感じで、喉が少しも詰まらなかった。煙で目も染みなかった。そうではないと、普段周りの人が自分のそばでタバコを吸うと吐き気がする。守護霊が降りてきていくらタバコを嗜んでも少しも喉が詰まったことがない。

【分析】

春光は、喫煙者ではないが、守護霊は生前喫煙者だった。守護霊が降臨してトランス状態になるとタバコがもてなしとして捧げられる。そして、紙が入手困難な時期に生きていたので、植物の葉でタバコを巻いて嗜んでいた。また、タバコも入手困難だった頃には黍＝モンゴルの茎を砕いて嗜んでいたことから分かる。春光が、手巻きタバコを嗜むとき、現在一般的に使われている紙ではなく、玉蜀黍の薄皮を使った。春光から見れば、玉蜀黍の薄皮でタバコを嗜んだのは自分の意思ではなく、守護霊が生前の方法で、生前の味で嗜んだのである。普段タバコの匂いにすら苦手である春光がタバコを吸いたがった時、自分が精神的に異常になったのかと一瞬自分を疑ったが、すぐにも、守護霊の意思であると分かった。そのため、タバコをもらって帰宅して、自然に嗜んだのは、守護霊が春光の身体を使って嗜んでいるからである。また、トランス状態で、守護霊が噛んで食べていることを春光本人は感じ取っている。すなわち、このトランスは、春光シャマンが自意識を失ったトランスではなく、

自意識をもったトランスである。しかし、タバコが苦手である春光が、守護霊がその体を使ってタバコを噛んで食べていることに対して、違和感が全くなかったことは、守護霊が身体の主役になったことを意味する。ここでは、春光本人に生じうる感覚が消えて、完全に守護霊の感覚になっている。

この事例で、春光が守護霊に視覚、味覚、臭覚など多元感覚を体験させながら、身体が守護霊に主導された多重感覚を体験している。

⑩ センデン・モド（文冠果）を見て嬉しい気分になった

春光が語る。

ある日、電動三輪車を運転してある民家の前を通ると、庭にセンデン・モドが生えていた。それを見て、心より嬉しい気分になった。センデン・モドの枝と実に興味を持った。守護霊がセンデン・モドの枝と実を生前病氣治療に使っていたと教えてくれた。そして、入手してきたセンデン・モドの枝を指の節の長さに切って保管しておいた。いつかまた使うと思う（それは守護霊が教えてくれる）。

【分析】



センデン・モドは、ホルチン地方でよく見られる木である。実を煎って食べたり、搾油したりする。また、漢方薬として枝が漢方薬の薬屋で販売されている。シャマンが病氣治療で使う場合もある。春光シャマンがセンデン・モドを見て、嬉しい気分になったのは、守護霊の感覚であり、守護霊が生前文冠果の木を見ており、病氣治療にも使っていたため、懐かしい気分になったと思われる。視覚を通した多重感覚である。

図 11 文冠果の実（筆者撮影）

以上、春光の語りを通じて、守護霊が様々な食べ物を欲し、それを食べてきたことをみた。これについて、春光がどのように理解し、考えているかを見てみよう。

「守護霊は、生前の貧しい生活を言い聞かせてくれるし、夢にも見せてくれる。守護霊が好きな食べ物、飲み物を憑依している私の口を借りて食べたり、飲んだりして味見している。私が守護霊の食べたがっているものを食べることは、口を通して守護霊に捧げた供物（トゥレシ）と思っている。わたしは、思った。守護霊が食べたがっているもの、例えば、生前食べていたものがどこにあるにしても、入手してきて食べて上げたい。一回でもいいからたっぷり食べて上げたい。

守護霊が生前食べていたものを、守護霊は私に憑いているので、私を通して食べたがっている。これは何を意味しているかということ、過去を忘れていないということである。そうではないと、今食べようとするとなんでもある。守護霊は、人の死霊なのでその社会で食べていたものを食べるという行為

を通して、わたしに何かを感じさせ、悟らせ、教育をしている。守護霊が生きていた時代はものが足りなかった社会である。守護霊はのどが渇き、飢えた経験があるから、訪ねて来た人をたっぷり食べさせて帰しなさいということである。

守護霊によると、守護霊は人として土の上に生まれたという。そのため、私が誰かの家に訪ねて行ったとき、その家を汚いと思ってはいけな。違和感を持ってはいけなと要求した。これは、先祖の時代のことを忘れてはいけなということである。

【分析】

春光は、守護霊が食べたがっているものをたっぷり食べることを守護霊への供養と考えている。自分の身体を通した供養であり、守護霊に直接送り届け、味わせる供養である。これは、守護霊が存在し、守護霊と直接交信・交流するシャマンのもう一つの特徴と言える。春光は、守護霊が生前の食べ物を食べたがっていることをまた別の意味でも理解している。それは自分に対する教育として理解している。食べるという行為を通じて、春光の人格の成長が促された。

2. 多元的感覚の絡み合い―夫に傷んだ食事を食べさせられた結果とは

春光シャマンが語る。

2021年7月、夫・海山（1977年生、農民兼左官）に殴られて骨折した手をヤス・ペラチ（骨接ぎに特化されたシャマン）に診てもらうため、ホルチン区（通遼市の中心都市）に行った。翌日、帰りのバスに乗っている時、夫に電話して、食事を用意して欲しいと頼んだ。車酔いをして嘔吐するので、車に乗る前は食べない。今回も、数回嘔吐して、気分がすぐれないので、実を言うとそれほどお腹が減っていないが、あまり空腹のままだと身体に良くないと家に着く前に夫に頼んだ。夫は言われた通り米を炊き、春雨とゆで玉子の料理を用意してくれてあったので、帰宅後すぐご飯が食べられた。その時、小さなお碗に入れた玉子と味噌の炒めもの³もあった。小さなお碗に入れてあることと料理の色から、残りものであることが分かった。特にそのおかずの色に違和感を持った。新鮮ではないと思った。しかし直接言わなかった。（色からおかずが傷んでいると分かったため）違和感があって「このおかずをいつ作ったの」と夫に聞いたら、「今朝だよ」と教えてくれた。

（春光）「本当？」

（海山）「本当」

（春光）「本当？」

（海山）「本当」

このように会話をしている間に、そのおかずを食べてしまったが、夫は一口も口にしなかった。「なぜ食べないの」と聞いたら、「あ、大丈夫、あなた食べて」とごまかされた。食後、すぐ嘔吐した。守

³ ホルチン地方でよく食べられるおかず。

護霊が降臨して退出する際に嘔吐するような感じだった。「今日自分は悪いことをしていないのになあ」と思った⁴。嘔吐している時の身体感覚から、車酔いをして、嘔吐する時の様子と違うことが分かった。守護霊による嘔吐と、車酔いで嘔吐する際の感覚が違う。車酔いをして嘔吐するとき、家畜が嘔吐しているようである。一時間後、夫に腹痛が生じ、下痢し、心臓がどきどきして、死にかかっているように身体を丸めて、横になった。全身に汗が吹き出た。翌日元気がないまま、左官の仕事に行こうとした時、「今日仕事ができないだろう。一日休んだら」と勧めると、「もう大丈夫だから」と言っていて、出かけた。「今日仕事はできない、途中で帰ってくる」と思った。本当に一時間後、帰ってきて、「身体がだるくて、痛くて仕事ができなかった」と言っていて、娘（2006年生）を行かせ薬を買って来させた。その時、自分の身体もすぐれないので、寝てしまった。夢に昨日の小さなお碗に入れられた玉子と味噌炒めが出て来た。目覚めて「やはりこれだ」と確信して、夫を起こして、食器棚に置いてある玉子と味噌炒めを見に行ったら、ウジ虫がいた。「昨日の玉子と味噌炒めは、昨日の朝作ったものではないだろう。なぜうそをつくの。すでに傷んでいただろう」と怒って言うと、夫は無言で認めた。一昨日の朝、作ったものだったという。「嘘を言って、わたしに食べさせて、どうだった？体がつかったじゃない」と責めた。

【分析】

日常生活に起きたこの出来事には、実に様々な感覚が絡み合っている。この出来事は、春光シャマンの夫が前日の残りの料理を騙して食べさせたことに起因している。春光は、視覚によって、新しく作られたものではなく、しかも傷んでいると分かった。そして、夫が嘘をついたことをも分かった。この視覚に2つの内容がある。①残りのものが小さな容器に入れてある。②料理の色。新鮮ではなく、傷んでいるように見えた。夫に確認したが、本当のことを教えてくれなかった。しかし、夫・海山がその料理を口にしないことに疑問が生じて、なぜ食べないかと聞いても、その理由を教えてくれなかった。話しながら食べたために、傷んでいることに気がつかなかった。しかし、食後、春光本人と主人がそれぞれ身体的な異常を経験している。春光は、その嘔吐する感覚から、それが守護霊によるものであって、車酔いで嘔吐する時の感覚と異なることがわかった。その場合の嘔吐を、春光は家畜の嘔吐に喩えたのである。

守護霊が春光の身体に憑いているので、春光は食べていることは、守護霊が食べていることでもある。そのため、傷んでしまった料理を食べた結果、守護霊が反応を起こしたことと分かったが、夫にそれを言わなかった。春光は、このことがまた、守護霊の自分に対する愛だと理解している。なぜなら、夫がうそをついて、傷んだものを食べさせたからである。

夫・海山が、残りものの玉子味噌炒めを一切口にしなかったことは、傷んでいることを分かっていたからである。食べていないのに苦痛に襲われたのは、いわゆる多元的な感覚である。腹痛や下痢の

⁴ 守護霊を怒らせることをすると、このように苦しめることもあるという。

原因は食べた料理にあるのではなく、うそをついた行為にある。うそをついたことが妻春光の守護霊の不快を招き、罰として、身体的な苦しみを受けた。翌日、夫・海山が仕事に出かけた際、身体的な痛みによって、仕事ができず、途中から戻って来ることを春光が予感したのは、守護霊による。春光が守護霊から「受信した」通り、一時間後に夫は帰宅した。それは守護霊が夫に与えた罰が続いていたからである。

夫が事実をいわずにいることを、春光は責めずにいたが、玉子と味噌炒め料理を夢に見せて、春光の疑心を解いたのは、守護霊である。春光は夫を責めることによって、守護霊の力を夫に示した。春光は、夫の左官の仕事が絶えず、収入が安定しているのは、守護霊のおかげと信じ、夫もそれを認めているが、守護霊に対する態度は一定していない。

この事例を多元多層的な感覚として考察してみる。①玉子と味噌炒めが作りたてではないことを春光は視覚によって、守護霊は霊力によって分かった。②その違和感は、守護霊と春光による二重感覚である。③嘔吐は守護霊の拒否反応であり、それが、春光の身体を通して顕われた。春光から見れば、嘔吐しているのは守護霊である。④春光シャマンの夫の痛みは、本人の身体の「内的」原因ではなく、「外的」の原因、すなわち、妻春光の守護霊による罰である。⑤翌日に夫は仕事ができないと春光シャマンが感じ取ったのは、守護霊に与えられた感覚である。⑥夫を責めて事実を明らかにすることが出来ずにいたが、守護霊に夢を与えられて（見せられて）、夫の欺瞞を本人に認めさせた。よって、夫は自分の不誠実から解放された。春光は、話しながら食べたので、味に意識が行かなかったと説明している。この事例で、春光シャマンは、視覚で残り物と分かっていても、味覚では見抜けなかった。もし、味覚で見抜いていたら、食べるのを止めていたし、この一連のいわゆる多元多重的感覚の経験は起こらなかった。

3. シャマンとしての救済措置—守護霊に与えられた感覚

(1) 本人に気づかれない措置

【事例 1】

春光シャマンが語る。

守護霊の祭壇に捧げているモンゴル・バダーをポケットに入れて、家を出る。何か出来事が起ころうとしている民家の近くに行くと、「ここだ、この家をご加護ください」⁵と言いながら、モンゴル・バダーを撒き散らす。こうすると、悪いもの（悪霊、障り）でも避ける。わたしは、そのモンゴル・バダーをボルハン（守護者）⁶と思っている。また、ある時、手を後ろに組んで家を出て、民家の前を

⁵ 守護霊に向かって願っている。

⁶ 守護霊に捧げた煎り米のため、守護霊の力が入っており、それによって、その家を守るということである。

歩き回る。その時の自分はまるで老人のようになる（守護霊が憑依して変身している様子）。どの家が出来事に遭遇しようとしているかを感じ取ったら、守護霊に祈って、守護を求める。回っているうちに道に迷ってしまうことがある。その場合、タクシーに電話して迎えに来てもらう。私が祈れば、守護霊が助けてくれるだろう。ある日、旋風で道を歩いていた幼児が舞いあげられたが、無事だったのを見て、守護霊（神）が道を守護していることが判った。道の守護霊（神）たちは疲れていると思い、守護霊を信じ、思いやりの気持ちがもっと強くなった。そうではないと（子供が強風に吹き上げられたことを目にしたこと）、自分の思いやりの気持ちが足りていなかったと感じる（成長）。

ある日、ある民家の前を通ると、「（この家の主人の）命にかかわることが起こる」（守護霊から受信）という思いが湧いた。その場で「あ、そうだ、この家の主人が事故に遭遇するところだ。もしその人がなくなると、この家が灰になったのと同じだ。どうか貴方たち（守護霊）は空気の中から助けてください」とお願いした。翌日、ものを借りる用事を装って、その家に行った。普段つながりがないので、急に訪ねていくとびっくりさせると思ったからである。家に入って、雑談しているうちに、守護霊に心の中で次のように頼んだ。「（起ころうとしている）大きな出来事を小さな出来事で済ませてください」。予感したことと守護霊に頼んだことはその家の人たちに伝えなかった。数日後、その家の主人が乗っていた自家用の農用トラックが横転して、身体を挟まれたが、命に別状がなかった。これを聞いて、「守護霊である貴方たちのおかげで、この家の主人を助けることができた」とお礼を伝えた。守護霊がこのように、起ころうとしていることについて、予感を与えてくれれば、守護霊に次のようにお願いをする。「シャマン服を身にまとして、シャマンになった。私に憑いている守護霊たちよ、どうか、この人たちを守護してください。自分はシャマンになって愛のツボが開いた。自分は、守護霊である貴方たちのご守護を賜っている。それを実際に見ている。それで、心より貴方たちに感謝している。わたしたちは、お昼働いて、夜は寝る。しかし、守護霊は昼夜問わず監視して守護してくれている。ですから、守護霊を愛しく思っている」。

【分析】

この事例は、実に多重感覚に富んでいる。守護霊に与えられた感覚と自分の感覚が錯綜している。守護霊が春光シャマンに村の誰かに災いが降りかかろうとしていることを感得させ、救済措置を取っている。その実践の中で、春光は守護霊にその人たちを守ってくれるよう心を込めて頼み、その命が助かったときには守護霊に感謝している。守護霊から見れば、春光は守護霊と心が溶け合っている良い乗り物（守護霊はシャマンにした人を乗り物と呼ぶ）である。

春光は、夜になると自分たちは休むが守護霊は休むことがなく、地域の人々の安全を守るため監視し、守護していることに深い思いを示した。それが春光の心を動かし、救済のための行動へとつながっている。そして、助かった当事者には自分のやったことを知らせていない。救済する（ケアする）相手と直接コミュニケーションを必要としないのがシャマンならではの特徴である。春光は、これに対

して、「知らせる必要がない。守護霊に感じさせられた内容を、守護霊に頼んで守護してもらっただけである。守護霊は非常に謙虚である。何をしても威張らない。守護霊が力を与えてくれない限り、わたしは普通の人間である。守護霊が威張っていないのに、わたしがなぜ威張るか。私は守護霊の使いもの、すなわち、乗り物である」と話した。春光は守護霊と一体になって、ケアすればよい。西平は、無心のケアにおいて、ケアする側とケアされる側が〈自我への執着を手放す〉必要性を論じている〔西平 2021：468-487〕。この救済措置において、春光と守護霊が一体になって、無心になればよい。それで救済措置が成り立つ。

【事例 2】

春光話す。

悪霊に取り憑かれている人に出会うことがある。そのとき、男女問わず、その人に近づいて、「貴方たち(悪霊)は、この人から離れなさい。わたしの風(ジャブル)が見えるか。わたしは一度言うが、二度は言わない。私を覚えているように」と自分の襟のボタンに(聞こえるほどの小声で)話す。

【分析】

この事例で、実に、豊かな感覚を現している。守護霊の力によって、悪霊を見抜き、そして、悪霊に離れるよう促している。「私の風を見ているか」と質問しているのは、守護霊である。「守護霊の風」とは、守護霊のことである。この事例で、「守護霊である自分がここにいることを知っているだろう」と脅かすのは、この人に二度と憑依してはいけないという意味である。「小さな声で話す」というのは、「襟のボタンにも聞こえるかどうかの小声で話す」という意味の言い回しである。春光の、「襟のボタンに聞こえさせて話す」というのは、悪霊に聞こえさせるためである。このプロセスの中で、悪霊に憑依されている本人が、悪霊に憑依されていると気づいていない可能性があり、さらに、春光が悪霊を追い払ってくれていることも知らない。本人に知らせ、説明しない治療(対処法)である。

(2) 本人や家族に働きをかける措置

【事例 1】

春光の隣家は、60 代の息子夫婦と 86 歳(1936 年生まれ)の母親の 3 人家族である。強気の嫁と義理の母親との関係が悪く、嫁が義理の母親を怒鳴る、罵る声がしばしば聞こえる。嫁の足が弱く、歩行困難に陥るときもある。春光は、隣家に訪ねて行って、嫁に次のように言う。「お姉さん⁷、足はそんなに弱くなったんですか。伯母より先に立とうとしていますか。伯母⁸は、世に生きる日はもう長くない。年老いた弱者である。何があっても我慢してください。伯母にあまり憎まれると、あの世から仕返しをされることになって、よくないだろう。まだ飲む、食べる福が残っている。お姉さんが伯母に対してやったことは、天の神のところにきちんと記録されている。伯母にやさしくしてあげれ

⁷ ホルチン地方で、他人を擬制親族名称で呼ぶ習慣がある。

⁸ 注 7 と同じ。

ば、天の神がお姉さんをきちんと守護してくれる」。

春光は、夫がいないときには、義理の母親に対して嫁が態度を一変するのを見て取った。ある日、その息子が春光の家の前を通るときに、「お兄さん、最近忙しいですか。伯母は、もう世に生きる日は長くない。年内のことだろう。仕事がない時は、できるだけ家にいてください。友人と酒を飲む日はたくさんある。しかし、伯母と一緒にいる時間は長くない。お嫁さんをよくほめてあげてください」とお願いした。

【分析】

春光は、多元感覚によって、隣家の姑と嫁の関係を読み取っている。ホルチン地方で、姑と嫁の関係がよくないときに、親戚や隣人が若い方が我慢するように勧めることがよく見られる。そして、靈魂観と因果応報の思想を取り上げて、納得させようとする。春光は、隣家の年寄りのことに心を配っている。シャマンとして、守護霊に与えられた感覚によって、隣家の義理の母親の寿命について予見し、それを伝えている。なぜそれを伝えるかという、もう長くないので我慢し、できる限り優しく接してほしいという願いがあるからである。夫がいないときに、姑にひどい態度を取っていることをその夫に伝えていない。それは、夫婦の円満を損なわないように配慮しているからである。また、隣家の主人がよく友人と一緒に酒を飲んで家を空けることを知っているから、家にいてその母親と一緒にいる時間を増やすことを期待した。これは、家にいる時間が長ければ、妻はその母親に夫がいないときほどひどくできない。また、本当に、世に生きる時間が少なくなっているので、できるだけ親孝行をするよう願っているからである。特に、86歳になり、体力が衰えつつある老婆が嫁に怒鳴られている際の心情を感じ取ったに違いない。また、余命が長くないことを同情する気持ちからその息子と嫁に働きかけている。

春光によれば、守護霊は次のように論じた。「時代が変わったのは事実だが、万の目を持つ天の神様は変わっていない。威張れば運が低く、遜れば運が高い。順風満帆の時ほど、謙虚さが必要である。人に畏敬の念をもって接しなさい。英雄として威張る必要はない。度を知れば、何の問題もない。先行きを見て（遠き慮り）、目先ばかりを見るな。バンザル（スカート）は暖かくなく、バルダム（傲慢）にはいいことがない（諺）。守護霊は非常に謙虚で、自分ができるとは威張らない」。そのため、私はもっと謙虚になるべきだ。春光が守護霊のこの教えを言いかせてくれた時、正直のところ、驚いた。叡智に満ちた守護霊だと思った。守護霊の教えは、春光への教育であるが、春光の他者へのケアの心構えとなっている。

【事例 2】

ナスンは（1927-2021）、12歳だった1938年にシャマンだった父方の伯父の霊に選ばれてシャマンになった。それ以来、シャマンの道83年の長老シャマンだった。いつも微笑みを見せ、控えめで慎ましい性格が知る人に親しまれた。2019年6月、春光は、初めてナスン・シャマンに会った。心よ

り喜びを感じたという。「それは、生身としての自分が喜んでいるだけでなく、自分の守護霊も喜んでいるからである」と語った。それ以降、数回ナスン・シャマンのところに訪ねて行った。ナスン・シャマンは、裁縫に得意な春光に頼んで、先代のシャマンから伝承されてきた100年前のシャマン服を新しく作らせた。しかも、春光が自分のために、一着同じ服を作ることを許してくれた⁹。これは、ナスン・シャマンが春光に対する信頼であり、重視でもある。春光は丸3ヶ月費やして無料で作ってあげた。その理由を、「ナスン・シャマンに会ったことを守護霊が喜んでくれたのは、ナスン・シャマンの功績を認めたことである。守護霊が喜んでいるから、このようにすると守護霊がもっと喜ぶと思った」と説明した。春光は、夜遅くまで夢中になってシャマン服を製作しているとき、ミシンの前に、ナスン・シャマンの守護霊と自分の守護霊が立って、喜んでいるのを見て、感動して疲れが消え去り、喜びに包まれたという。その瞬間、春光は、自分の守護霊とナスン・シャマンの守護霊が共にいることを感じたに違いない。

春光シャマンは次のように語る。

2020年夏のある日、守護霊が、ナスン・シャマンを心より愛しく思っているの、転倒する恐れがあることを予見した。それを私に感じさせてくれて、(ナスン・シャマンの)娘さん(60代、農民)に伝えて、娘さんの方からナスン・シャマンの守護霊にナスン・シャマンを見守るよう祈ることを望んだ。娘さんに、電話して、「お父さんの守護霊からお父さんの命をご守護くださるよう願い願いなさい」と伝えた。ナスン・シャマンの娘さんがそれを実行した。冬のある日、ナスン・シャマンが本当に転倒して、頭部に外傷を負い、出血したが、命は助かった。

ナスン・シャマンは、80代の時に、脳梗塞に罹り、それが原因で、左の手と足の動きが鈍くなっていた。

【分析】

この事例は、多元多重感覚に富んでいる。春光シャマンの守護霊から見れば、ナスン・シャマンは、善徳を積まれた良いシャマンである。そのため、春光がナスン・シャマンに会った時、春光の身体を通じて喜びを表した。守護霊の喜びに春光も共感して喜んだ。春光が二重の喜びを味わっている。守護霊の喜びに喜び、また、シャマンとして長老シャマンに会ったことに喜びを感じている。ナスン・

⁹ ナスン・シャマンのシャマン服は、一見、現在のホルチン地方で一般的に身に纏われているネクタイ(実は蓮の花弁を象っている)を垂らしたようなスカート式のシャマン服と変わらない。しかし、細かいところに特徴がある。スカート式のシャマン服を構成しているネクタイ式のものに花、鳥、吉祥模様が刺繍されている。刺繍の上と下に色が異なる細い布を垂直に並べて縫い合わせてある。さらに、垂直に並べられている細い布の行列は間隔をおいて、細い布の上に三角の布飾りを並べて縫っている。

シャマンに三ヵ月もかけて、無料でシャマン服を作ってあげたことは、春光とその守護霊が、ナスン・シャマンとその守護霊に対して敬意を表明したことになる。それにナスン・シャマンの守護霊も喜んだ。実に豊かな関係と豊かな感覚が働いている。ナスン・シャマンは顛倒したが、命が助かったことを春光シャマンは次のように理解している。「守護霊同士が互いに手助けをすれば、ナスンの命を守り、延長させることができる」。ここで言う守護霊同士とは、ナスン・シャマンと春光シャマンの守護霊である。春光シャマンの守護霊がナスン・シャマンを予見し、自分の乗り物である春光を介して、ナスン・シャマンの娘に、父親の守護霊に祈願することを期待した。ナスン・シャマンの娘はそれを実行することによって、父親の健康と先祖の存在に対する意識を活性化させる機会を得た。それは、春光の守護霊のおかげである。春光がナスン・シャマンのためにシャマン服を夜遅くまで夢中になって作っている時、自分の守護霊とナスン・シャマンの守護霊が目の前に現れて喜んでいることを感じ取っている。視覚によって、多重感覚を体験している。

春光は、守護霊が与えてくれた感覚に従って、自分の住む村と他所の民家をしばしば訪ねていく。経済発展に伴い、生活がより豊かになりつつあるが、村民同士が互いの家に訪ねて行ったりすることがまれになりつつある。春光がこのように訪ねていくことによって、人のつながりを活性化している。話を聞いてあげたり、相談に乗ってあげたりしている。「私にいろいろ話して、心が楽になればと思う。」「談笑して悩みを吹き飛ばし、雑談して疲れを取る」と言ったことを聞いて、「わたしの訪問は、癒しと治療が同時に進行している」と話したことを思い出した。



図 12 春光シャマンがナスン・シャマンに作ってあげたシャマン服（撮影 2020 年 11 月、春光）。

4. 家族の痛みの感覚

(1) 夫の場合

春光の夫・海山は、農閑期は左官の仕事をしている。春光も夫と一緒にすることがよくある。海山は仕事に励み、誰から見てもよい夫、優しい父親である。しかし、その反面、海山は妻・春光に暴力

を振るうことがしばしばあり、これまで、手足を数回骨折させている。最近では、2021年6月に春光は鍬の棒で殴られて、右側の肩関節を骨折した。春光は丸3ヶ月間仕事ができなかった。守護霊が、海山に科した罰は、煉瓦積みや煉瓦敷きの仕事をしている時、どうしてもミスが生じ、最初から何度もやり直しをさせた。どうしても間違ってしまうので、煉瓦の積み直しや、並べ直しの作業を繰り返し、へとへとになって帰宅した。前の経験から海山は、これは、妻の守護霊の罰と分かった。

【分析】

春光の夫が春光を殴って、怪我をさせた。守護霊はその痛みを春光の身体を通じて受けた。そして、守護霊によって、海山は痛みを受けた。多重感覚が働いている。海山は、その父親が暴力を振るう家庭に生まれ育った。家庭をもった後、虐待の連鎖として、家族に暴力を振るうようになった。妻・春光を殴り骨折させたことに後ろめたさを感じ、仕事に集中できず、ミスを繰り返したのではないかと思われる。しかし、そのミスが異常と言えるほど、一日中繰り返し続いたことに本人も前からの経験からその妻の守護霊の罰だと認めている。海山が疲労困憊から、妻の痛みに共感した。守護霊の存在を意識し、「二度と殴らない」と反省し、その後の行動を修正する、つまり脱暴力への意欲を示したという。このようなことが繰り返されても暴力は皆無になったわけではないが、回数は減るきっかけになっているという。これは守護霊に与えられた罰のおかげであると、春光は満足している。守護霊は、「愛が毒蛾を招き、ハサミの刃の上に立ってしまった」と春光の夫の暴力に怒りを表し、春光に感じさせたという。海山は、加害者意識よりも、被害者意識が強い。罰を受け続けているにも関わらず、暴力が完全に止められないことから、虐待の連鎖の根強さが感じさせられる。シャマンの夫として、海山はその妻の守護霊の罰を受けて改善を促されている点に特徴がある。

(2) 子供の場合

①娘が春光のシャマン太鼓を壊したその後

春光は語る。

娘があるもの(明確に語らず)を買ってもらいたかったが、わたしが買ってあげなかったことで、怒って、わたしの太鼓を壊してしまった。それを私は気づいていなかった。娘は、30 km離れたところの中学校に通い、学校の寮に住んでいる。学校に戻った後、娘は「足が痛い」¹⁰と電話がくると感じたので、娘の足の痛みの状況を確認してほしいと、翌日に夫を娘の学校に行かせた。するとやはり足が痛くて、歩行困難となっていた。夫が娘を連れて帰って来た。約1ヶ月間点滴をし、鍼灸治療を試したが、効果がなかった。守護霊に祈って、治療法を伺ったが、返事がなかった。娘の足に酒を吹きかけたが、変化がなく、痛みは改善されなかった。そこで、娘が守護霊を怒らせることをしてしまったと思った。そして、次のように謝った。

¹⁰ 春光の娘は、発育性股関節形成不全として生まれ、数回手術をしたことによって、時々足の痛みが現れる。

(春光)「お許し下さい、娘が過ちを犯してしまいました」(この時点で娘が何をしたかはまだ不明)。

(守護霊)「道具 (タンガルグ・イン・エド) ¹¹がそのままあるか」。

(慌てて、太鼓を見に行くと破れていた)

(守護霊)「道具 (タンガルグ・イン・ユム) を壊したなら、病気 (タホル) になるはずだ」。

(春光) そうだね、娘が太鼓を壊してしまったよね。娘に聞くとどうしても教えてくれないから、叱った。「前に、お菓子を買ってほしいと言ったが、買ってあげなかったから怒って太鼓を壊してしまったよね。それが原因で、足が痛くなり、わたしの身体にも不調が生じた。私が死んだらあなた(娘)が元気でいられるか」、そう言って自分も泣いてしまった。(娘の足を診てもらうため、お金も費やした。) それから、鞭 (シャマンの治療道具) で娘を殴った。その後、娘を跪かせて、守護霊にお酒を捧さげて、謝らせた。すると、すぐにも、娘の顔に元気が戻った。その日に足の痛みが消え、わたしも不調から解放された。

【分析】

春光の娘が食べたがっている菓子を買ってあげなかったことで、母親の大事な太鼓を壊してしまった。中学生の娘はちょうど反抗期にあって、太鼓を毀したことはそのはけ口だった。太鼓は、シャマン本人だけのものでなく、守護霊のものでもある。その行為は、母親に対するだけでなく、守護霊に対するより不敬である。そのため、守護霊が春光とその娘を痛みつけた。春光は、娘が学校に戻った後、その足が痛くなっていることを感じ取った。これは、守護霊によって、感じ取らせられたこととして理解できる。一ヶ月間治療しても痛みが改善されないの、痛みは外部の影響によるものと気づく。守護霊に治療法を聞いたが返事がなく、春光が治療しても効果がなかったことは、守護霊との交信・つながりが守護霊によって部分的に遮断されていることが分かる。春光が娘を治療しても効果が表れないことは、守護霊が力を貸してくれないと治療効果がないことをはっきりと示している。シャマンとしての力は、守護霊に与えられ、生かされていることを実感させられている。

その娘が太鼓を壊したことを、春光は知らなかった。それは守護霊が春光に知らせなかったということである。すなわち、感じさせなかった。そのため、守護霊による痛みつけと知らずにさまざまな治療を試した。効果がなかったを受けて、春光は初めて娘が守護霊の怒りに触れることをしてしまったと気づいた。この気づきは、シャマンとしての力ではなく、経験による気づきである。守護霊が娘の足を痛みつけていた期間中、春光本人の身体にも不調が生じた。守護霊は親子に罰を与えたが、その原因を知らせなかった。肉体的な痛みを受けただけでなく、治療のため経済的な損失をも被った。

¹¹ シャマンとその守護霊の使う道具のことである。タンガリグとは、誓い、エドは、もので、タンガリグ・イン・エドは、誓いのものである。すなわち、シャマンと守護霊が使う専用のものという意味である。「タンガルグ・イン・ユム」の「ユム」は、ものという意味である。

娘が守護霊に謝ると、すぐ痛みが消え、顔色が戻ったことも、痛みは守護霊によるものであることを春光とその娘に実感させた。春光の娘は、母親の守護霊と母親に無礼なことをするとどうなるか、分かっていなかったとすれば、このことを通じて、それを実感させられた。春光の娘は、先天的な発育不良によって、足の痛みを時々感じるが、今回は、身体的な要因ではなく、外部から与えられた痛みである。

守護霊は、同時に春光とその娘に痛みを与えた。原因を知り、適切な措置を取るまでその痛みの感覚が続いた。原因を知ったことも守護霊の春光に与えた啓示であり、直接的なコミュニケーションによるものである。その娘は、謝るという行為によって、母春光の守護霊とコミュニケーションを行った。多元感覚と多重感覚と言える。

②息子を殴った時に起きた出来事―亡き義理の父親の霊が出現

春光シャマンが語る。

2020年冬の出来事である。私は料理屋で働いていた¹²。週一回しか休みがなく、その休みの日を利用して、家の内壁を白いペンキで塗り替えていた。息子（2015年生）シディが、どうしてもお菓子をねだった。私は、仕事を優先して、「待って」と言って、すぐ買ってあげなかった。すると、シディが泣き続けた。言うことを聞かないので、お尻を軽く蹴った。本当に軽く蹴った。両手がペンキで真っ白だった（ので蹴った）。その後、息子がオンドルに上がって、泣き出した。聞いていると、泣声が呻き声に変わった。あら、この声は、義理の父親（1944-2016）の声ではないか。よく見ると、シディは汗をかいて、身体を丸くして呻吟していた。亡き義理の父の霊が取り憑いて声を出していると分かった。そして、それを（亡き義理の父の霊に）知られないように息子に声をかけた。

（春光）「何を食いたい。さっきお母さんはシディちゃんを殴ってしまった」。

（息子）「餃子を食いたい、開魯老窖（通遼市開魯県産蒸留酒）を飲みたい、マーボー豆腐を食いたい」（すべて義理の父親の生前の好物である）。

（春光）「はい、そうしよう」と言って、息子を連れて夫と3人で料理屋に行った。食べたがっている料理を全部頼んだが、息子がどうしても酒を飲もうとした。隣の席にちょうど開魯老窖を飲んでいられるお客さんがいたので、「すみません、子供がどうしても飲みたがっているのです、少しいただけますか。味見させたい」と言った。すると、「なぜ、この小さな子に飲ませるか」と不思議がられた。「少し飲ませて、辛さを知ったら再び飲みたがらないと思う。お願いですが、少し下さいますか」と頼んで、少しもらって息子に飲ませた。その後、（義理の父親の霊に）炭酸飲料を飲ませて、取った料理を全部食べた。満足した様子だった。

（春光）「もういい」。

¹² 正月が近付いてくると、家屋の内壁を塗り替える、あるいは壁紙を張り替えることがよく見られる。

(息子)「はい、よく食った」(亡き義理の父親の話し方と表情とそっくりだった)。

(春光)「帰ろうか」。

(息子)「はい」。

帰宅後、息子の表情がやはりちょっと違っていた。身体がだるく、元気がなかった。義理の父の霊が子供に憑いたままだった。

夜になって、義理の父親の霊に次のように言い聞かせた。「見なかったと思わないでください。坊やのお爺ちゃんであるあなたを今回尊敬します。食べたいものを食べさせてあげた。今後、この子に再び憑依してはいけない。もし再び憑依すると、9つの穴(スプ、身体の9つの窪んだ部分)に針を刺します」(悪霊を追い払う時の一つの治療方法)。続いて、切紙(イルガ)を切って、夫に楡の枝と一緒に外に持って行って燃やすよう頼んだ。夫が家に入って来た時、顔に酒を吹きかけた。

義理の父親の霊が(春光が)息子を蹴る前にすでに来て取り憑いていた。2、3日前だったかもしれない。それに私が気づかなかった。息子を蹴ると現れた。義理の父親も息子に取り憑いて、どうやって私たちに気づかせようかと機会を待っていた。息子を蹴ると義理の父親を蹴ったことになってしまった。夫が私を殴ると、バドマ(1975年生、女性シャマン)お姉さんが、「あなたを殴ることは、あなたの守護霊を殴ったことと同じことだ」と言ってくれたことを思い出した。義理の父の霊が息子と会いたがって、やって来ていた。また、この機会を利用して、食べたいものを食べたがっていた。よく、「生きている人が、死んだ人に愛しく思われることに耐えられない」(言い回し)¹³と言うだろう。その通りだ。このことを通じて、今シャマンが増えているが、守護霊は、本当の守護霊ではない。このように死んだ人間の霊に取り憑いているのを、守護霊に選ばれたとして、シャマンにさせる。ことが(実際には)多いことが分かった。

守護霊にとってわたしは乗り物である。守護霊が私を守護してくれている。しかしながら、守護霊は私とつながっているだけでなく、子孫および世の多くの人々とつながっている。私は夫と子供の世話をしているが、守護霊は多くの人の世話をしている。守護霊が故郷の人々を掌に載せたように見守っている。

【分析】

春光シャマンの守護霊は、夫・海山の祖霊である。春光の義理の父親は生前、アルコール依存症で、酒乱があった。そのため、理由もなく、春光は罵られることがしばしばあった。これを守護霊は当然知っていた。春光に繰り返し我慢するよう言い続けた。春光の義理の父親が亡くなった時に、守護霊が子孫の死に心を痛め、「もう少し食べさせて、もう少し飲ませていたら」と言いながら、(春光の身体を使って)泣き悲しんだという。これを受けて、春光は、「守護霊が私を乗り物として選んで、わた

¹³ 死んだ人の霊に取り憑かれると、病気になったり、精神的に異常となったりすることがあるので、そのように言われる。

しを可愛がってくれているが、自分の子孫（春光の義理の父親）をも愛していると分かった」と言った。

春光のところにクライアントがやってくると、守護霊が意識の平常状態で病因と解決方法を教えてくれる。また、春光が守護霊を降臨させて、守護霊に直接見てもらう。時に、守護霊は意識の平常状態で、必要な情報を映画のように見せてくれる。しかしながら、亡き義理の父親の霊が息子シディに取り憑いていることは事前に教えてくれなかった。守護霊が教えてくれないとシャマンは知らないし、見えない。普通の人と変わらない。守護霊は、子孫である春光の義理の父親の霊が悪さをするために、春光の息子に取り憑いたのではないことを知っている。子孫を愛しく思い、さらに、生前食べていた料理、飲んでいた酒を、孫に憑依して、孫の口を通して食べたがった。

春光が言うことを聞かない息子を蹴ったのを機に、義理の父親の霊が孫のシディに正体を露わした。普通の人にはそれに気づかない。シャマンとしての春光は、守護霊によってそれを見抜いて、食べたがり、飲みたがっているものを満足させた。春光から見れば、これは供養である。2020年の冬の時点で、春光の息子は5歳であるのに、酒を飲もうとした。これは、アルコール依存症だった義理の父親の生前の習性の現れである。

春光は、このことを受けて、慌てることなく、帰宅後、切紙を切って、息子の身体に憑依している義理の父親の霊をその切紙に移して、夫に頼んで、外で燃やして送り出した。その夫が家に入ってくるとき、酒を吹きかけたのは、義理の父親の霊が夫について再び戻ってこないように追い払うためである。

ところで、春光は、現今死者の霊に取り憑かれて障りが現れた時、それが切り離すべき霊であることを見抜けずに、守護霊に選ばれたと診断して成巫儀礼をするシャマンが多いことを知っていた。今回、その息子の身に起きたことによって、自分の見方を確かめた。

守護霊は、予見、予言、透視能力、見抜く力を乗り物であるシャマンに常時に与えるのではなく、守護霊の都合、乗り物の都合およびその家族やクライアントの都合に応じて、オン・オフしている。守護霊は恒常的に乗り物であるシャマンとつながっているわけでないことがあきらかになった。この事例のように、部分的なつながりによって、守護霊の力を実感させられ、シャマンはさらなる謙虚さを求められる。

春光は、亡き義理の父親の霊と多元、多重的な感覚を体験している。亡き義理の父親の霊は、その孫の食べるという行為を通じて、多元感覚を体験している。

5. 春光の娘の行動―共感の先にあるものとは

春光が語る。

ある日、1人で家にいたとき、守護霊が生前草でできた靴を履いていた様子が見られた。乞食ラ

マ¹⁴のようだったその姿を見て泣いた。その姿を見て、人を大切にして生きていこうと思った。人を愛し、優しく接したいという気持ちが強くなった。このように思うようになったのは、守護霊の教えや、見せてくれる場面や様子によってであった。子供たちに守護霊に教えられ、見せられた内容を繰り返し言い聞かせた。するとある日、娘は自分がした良いことを教えてくれた。

① 車酔いする年寄りと座席を交換。バスに乗った時、ある老婆が車酔いすると話しているのを聞いて、自分が座っている前の席を譲って、老婆の座っていた後ろの席に座った。

② 春光の娘が年寄り運転手に温情をかける。ある日、電動三輪タクシーに乗ろうとしたとき、その隣のタクシー運転手が年寄りだったので、「お年寄りはお金を稼ぐのは容易ではない。2 元（村内では、料金が2 中国元）を稼ぐと食べるご飯があるだろう」と思って、年寄りのタクシーに乗った。しかし、最初に乗ろうとした若い運転手に申し訳ない気持ちになった。

これを語った春光は子供の優しい行為に満足した様子だった。

【分析】ラマ僧に身をやつした守護霊を憐れむ心から、春光の人を大切に親切にしていこうという思いが子供たちに通じた。春光の多元感覚がその娘の共感につながった。共感が共感を生んだと言える。春光は語る。

「守護霊と心が一致すると、守護霊の生前の様子や中身の濃い内容、意味深い場面を見せてくれる。私が守護霊を感動させなかったら、守護霊に教えてもらわず、見せてもらえなかったはずだ。守護霊が教えてくれていることを聞いているうちに、涙が溢れる。守護霊と交信しはじめて、その生前の様子をよく教えてくれるようになったのは、最近二年のことである。守護霊たちも私の度量、信頼性を試している。私に言ってくれた内容には、人に言ってほしいことと言ってほしくないことがある。それを守っているので、守護霊の信頼を得た。守護霊は、鏡で見ているようにはっきりとわたしのことを見抜いている。現在、病気を機械で検査してはっきりと見えるようになっただろう。それと似ている。守護霊の信頼を得たので、守護霊も本当のことを教えてくれるようになった。守護霊の課した内容を守らないと守護霊はいろいろ教えてくれないし、守護霊に崇られるかもしれない。守護霊は私の言動を日々監視している。私の身体に監視カメラが設置されてある。私が正しくしているかどうかを監視している」。

守護霊は春光の人格の成長を長い年月をかけて見守っている。その成長が春光の子供にまで及んでいる。娘の成長は、春光の多元多重感覚の賜物である。

6. 供犠羊と共感

¹⁴ 乞食ラマとは、乞食僧侶という意味だが、ホルチン地方ではかつて、乞食、特に精神的に異常となり、住職不定となって乞食をしている人のことを指した。

ホルチン地方では、天の神、地霊を含めた神々と先祖に供儀を捧げる。シャマンはさらに、守護霊に供儀を捧げる。基本的に、羊、山羊、豚、鶏が採用されている。この中で羊が最も多い。毎年旧暦5月から9月にかけて供儀祭祀が行われる。シャマニズムが活性化している今日、これ以外の月にも行われていることが見られる。

【事例 1】

春光が2021年夏、ある70代の女性シャマンがその50代の息子シャマンと一緒に供儀祭祀を取り仕切っている、以下のような動画を見て、供儀の羊に対する態度に心を痛めていた。神々、あるいは、守護霊に捧げたという意味で、2人の男性が羊の前後の足を持ちあげて、羊を仰向けにして、時計回りに東、南、西、北の順に前後にゆっくりと揺らしながら、「ジュエ、ジュエ」と声を出す。

50代の息子シャマンはそのとき、力を入れて、早いスピードで羊の体を揺らした。これに対して、春光は次のように語る。「羊をゆっくりと軽く揺らすべきだが、あんなに早くて力を入れて揺らしている。羊はめまいを感じて、『あ、地震が起こったか』と思っただろう」。

① 羊を守護霊に叙する。羊を跪かせる、あるいは横にして、太鼓を叩きながら、呪文を念じて酒を羊に吹きかけておとなしくさせる。このプロセスを行う際、50代の息子シャマンは、羊の首を足で押さえておとなしくさせようとした。それを見て、春光は、次のように語る。「真心を込めて捧げている供儀を守護霊も真心を込めて受け取る。その心のすべてを羊に託すことができる。守護霊は3年間待たされて¹⁵、捧げられているから、守護霊も喜んで受け取る。羊をおとなしくしようと首を足で踏まなくても、守護霊が受け入れた証として、四つ足に力が入らなくなって、まるで死にかかっているようになる。羊の関節から力が抜けている音が聞こえる」。

② 羊に酒を吹きかける際、50代のシャマンは、尾のところから始め、胴体、頭の順に吹きかけた。これに対して、春光は、「頭から酒を吹きかけ始めていたら、あの世に行った際に、羊は誇らしく感じるだろう」と話した。

【分析】

供儀儀式の一環として、羊を持ち上げて前後に揺らすことについて、伝統的なやり方では、ゆっくりと軽く揺らす。それは、羊に対する敬意であり、捧げている神に対する敬意でもある。しかし、50代の男性シャマンの行為はちょうど逆である。春光は、そのやり方によって、羊の感じる感覚を語っている。羊の首を足で押さえたことについてである。羊をおとなしくしようと足で首を押さえることがしばしば見られる。筆者のこれまでの参与観察から言うと、羊がおとなしくなると、横になったままのパターンと跪いたままのパターンがある。また、逆の現象として、なかなか落ち着かなく、横になるとすぐ立ち上がることがある。春光は、羊と守護霊への敬意が足りないと批判している。また、春光に羊の力が抜かれている音が聞こえるとは、普通の人に考えられない。その瞬間は、シャマンは

¹⁵ 守護霊によって、三年に一回供儀を要求する。

羊の中に入って羊を感じているのではないかと思った。守護霊の力によって、羊と共感した。この経験は春光が今回の動画で感じたことだけではなく、別の儀式で以前にも感じたことであると説明している。

そして、春光は羊をおとなしくさせるようと酒を吹きかける際、しきたりに従わず、尾のところから吹きかけ始めたことに心を痛めた。それは、羊のためだった。しきたりでは、頭から尾の順に吹きかける。それは、頭部を尊重するからである。供犠羊の尾のところから酒を吹きかけたことは、伝統的なやり方に反した行為である。それは、羊の体面にとって良くないと考えている。羊の立場に立った多元多重感覚である。



左から図 13 と 14 50 代のシャマンが羊の首を右足で押さえ、太鼓を叩きながら尾のところから酒を吹きかけている様子。図 15 別の事例で、羊がおとなしくなった様子（2021 年 10 月）。

【事例 2】

上の事例と関連して、女性シャマンのオラナ（50 代）の感じ方を挙げてみよう。オラナは、2021 年 8 月、次のように語っている。

「数年前に、姉弟子が守護霊に羊の供犠を捧げる儀式に、師匠と兄弟子、弟弟子と一緒に参加したことがある。太鼓を叩いて、潰されるところの羊を見てショックを受けた。殺される直前の羊は怖がっていることが顔に現れていた。肉体が萎えたのではなく、顔が垂れてしまった。人に喩えると、その瞬間、悲しみで心が死んでしまった顔をして、頬が凹み、深い心のストレスが溜まっている人間のように見えた。それ以降、わたしの守護霊は供犠をほしいと言わなくなった」。

【分析】

オラナは供犠として殺される直前の羊の悲しみ暮れている顔を人間のように感じた。その瞬間、オラナは羊の中に入って羊になっていたと言っても過言ではない。羊のため心を痛めたその心情をオラナに憑依している守護霊も同じく感じたに違いない。その瞬間、オラナの心と守護霊は溶け合い、一

つになった。その結果、もはや供儀を要求しなくなった。すなわち、その共感が供儀の実践に影響を与えた。守護霊が乗り物であるシャマンに供儀を捧げてほしいと要求することがよく見られる。その目的は乗り物であるシャマンが守護霊の存在を意識し、尊敬してほしいためである。シャマンの基本的な役割は、人を助けるためである。現実にはシャマンが守護霊と合一することはすぐにできるものではない。それは、守護霊の指導、様々な試練を乗り越えて得られる。オラナが羊の悲しみを羊になったように感じたことが守護霊に認められた。オラナにとっての褒美である。それが、勇気、自信、そして、さらなる共感を生む。

ホルチン地方で、動物（アミタン）を人間（フーン）と呼び、人間を動物と呼ぶ習慣がある。このことに従って考えると、人間は動物であり、動物が人間である。動物を表すモンゴル語のアミタンは命があるものという意味である。命という点では、人間も動物も同じという考である。このことから、現代社会では自分の身体、いのちが生かされていることを、私たちは忘却していることに気づかされる。それを西平は「スピリチュアリティ」と称している[西平 2021：485]。前出の羊の首を足で踏み押さえ、力を入れて揺らす行為は、西平の言葉を借りれば、羊のからだ、いのちを忘れた傲慢ではないか。しかし、それに異議を申し立てる春光がいる。そして、命を奪われるところの羊の悲しみを共感したオラナ・シャマンは、羊のからだを支配し、羊のいのちを操作しなくなったではないか。

供儀として潰されて捧げられるところの羊の顔と体に現れた変貌を感じ取ったオラナは、近所の人から疎外されている精神障害者に寄り添っている。彼女は孤立しがちな弱者につながる、癒しの存在でもある。そこには深い共感と命の尊敬、愛とを見ることができ、オラナにとっては、それは自然で、日常生活の一部にしか過ぎない。オラナは、羊の表出された内面世界に多元的に共感したことにその守護霊がまた共感し、多元多重感覚が生まれた。

まとめ

本稿で取り上げた春光シャマンとオラナ・シャマンの霊界、人間、動植物を含めた多元、多重感覚は、その日常経験のごく一部である。この感覚は春光とオラナに特別なものではなく、例えば、奄美のユタ自身の経験談からも霊界と生きる実に豊かな多元的感覚経験が伝わってくる[葉月 2014；円聖修 2017]。守護霊は普通の人の目には見えないが、シャマンには確実に存在し、しかも、生にいろいろ影響を与えている。シャマンの日常は多元多重感覚に富んでいる。

ホルチン地方では従来、亡くなったシャマンの霊が後継者を選んでシャマンにすることが主流だった。ところが、近年盛況を呈しているシャマニズムでは蛇や狐など動物の霊が人間をシャマンにすることが増えた。その中で、本論で取り上げた二人のシャマンの守護霊は亡きシャマンの霊である。この両者には、複数の副次的な守護霊が存在し、それとのさまじきに豊かな関係の中でシャマンとして生きている。

守護霊は春光シャマンの身体に憑依して、その身体を共有している。守護霊が生前食べていた食べ物を食べたがると、春光も同じく食べたくなる。しかも、時にたまらなくなるほど食べたくなると、できるだけ食べる。その行為を、春光は、「口を通した守護霊への供養」と考えている。すなわち、食べる行為は、守護霊への愛と敬意である。料理は守護霊の生前の味の再現であるが、守護霊から見れば、食べることは本当の目的ではなく、それを通して、今日の生活を大切にし、人を大切にするという教育となっている。味/食は共感を生む装置であり、成長と行動のきっかけにもなっている。また、春光は、守護やケアが必要な相手と直接会わなくても、守護霊からメッセージを受け取ると、その相手の守護を祈る。こうして、クライアントと直接的なコミュニケーションを介することなく必要としないケアをも提供している。

供養祭祀儀礼において、儀式を取り仕切っているシャマンの羊の扱いと、屠られる羊の表情について、春光とオラナは、実に多角的な感覚をもった。羊の側から考え、羊の心情に共感し、羊に人格を与え、一人の人間であるかのように憐れんでいる。両シャマンの共感が相手の気持ちに寄り添うケアへとつながっている。このことは、島菌の言うように「人が『からだ』と『こころ』だけで生きているのではなく、『魂』の部分大切にせざるをえない存在であること」[島菌 2021: 619]を明らかに示している。春光とオラナは、まさにこのようなケアを提供している。守護霊と生きる春光シャマンとオラナ・シャマンは、正に多元多重感覚に富んだケアを実践している。



図 16

春光は、2021 年 7 月、自分の庭で栽培されている玉蜀黍を見て、「(玉蜀黍は) 急いで茎頂を出ようとしている」と言った。日に日に伸びている玉蜀黍になった感覚である。

(撮影 2021 年 7 月、春光)。

追記

春光シャマンとオラナ・シャマンの感覚経験は、インタビューして得たものではない。シャマンの経験をより細かく、深く知りたいと思っている時、春光シャマンは自ら語ってくれた。そして、春光は 50 代のシャマンが取り仕切る供養祭祀儀礼に対する感覚を話してくれた数日後、オラナ・シャマ

ンが偶然にも、屠られる直前の供犠羊の表情に感じた経験を語り聞かせてくれた。筆者には感動しかなかった。たくさんの存在に筆者自身が生かされていることに深く感謝している。

謝辞

本論は、恩師の荻原真子先生に貴重なお時間をいただいて、ご教示を賜りました。心よりお礼を申し上げます。

引用・参考文献

アラン・コルバン（小倉孝誠、野村正人、小倉和子訳）

1997（1993）「歴史学と感覚の人類学」『時間・欲望・恐怖—歴史と感覚の人類学』

藤原書店、pp.267-285

円聖修著、福寛美監修 2017『奄美三少年ユタへの道』南方新社

サラングワ 2019『ブォ・シャマニズムの現在—内モンゴル・ホルチン地方の新地平』牧歌舎

島蘭進 2021「新たな医療の領域と精神文化に根ざしたケア—孤立化の時代における地域文化資源」

鎌田東二編『身心変容技法シリーズ③ 身心変容と医療/表現—近代と伝統—先端科学と古代シャーマニズムを結ぶ身体と心の全体性』日本能率協会マネジメントセンター、pp.604-620

鶴岡賀雄 2018「アビラのテレジアの『身心変容』の諸相『内感』とその行方」

鎌田東二編『身心変容技法シリーズ② 身心変容のワザ—技法と伝承—身体と心の状態を変容させる技法と伝承の諸相』サンガ、pp.64-80

ドナルド・G・ダットン＋スーザン・K・ゴラント著（中村正訳）

2001『なぜ夫は、愛する妻を殴るのか？—バタラーの心理学』作品社

中村正 2002「家庭内暴力加害者研究の概略と争点」『立命館人間科学研究』（第3号）、

立命館大学人間科学研究所、pp.55-71

西平直 2021「無心のケアのために—断片ノート」

鎌田東二編『身心変容技法シリーズ③ 身心変容と医療/表現—近代と伝統—先端科学と古代シャーマニズムを結ぶ身体と心の全体性』日本能率協会マネジメントセンター、pp. 468-487

西智弘（編著）2020『社会的処方—孤立という病を地域のつながりで治す方法』学芸出版社

浜田明範

2018「存在論的転回とエスノグラフィー：具体的なものの喚起力について（特集 一元から多元に広がる関係へ）」『立命館生存学研究』（1）、立命館大学生存学研究センター、pp.21-31

マリリン・ストラザーン（著、大杉高司、浜田明範、田口陽子、丹羽充、里見龍樹 訳）2015

『部分的つながり（叢書 人類学の転回）』水声社

葉月まこ 2014『ユター遥かなる神々の島』 南方新社

宮坂敬造

2021「〈研究ノート〉デザインの人類学と多元感覚人類学が繋がる新たな人類学的課題の探求

ーオーストラリア先住民のメッセージ・スティックから、心理歴史誌的文化療法までー」

『東京通信大学紀要』（第3号）、東京通信大学、pp. 261-278

2020「感覚人類学の新たな展開ー多元感覚人類学への道筋拡大と情報社会の進展へ応用可能性ー」

『東京通信大学紀要』（第2号）、東京通信大学、pp.169-185

レイモンド・ザンベリ編（伊従信子編訳）2011『リジューのテレーズ 365 の言葉』 女子パウロ会

（さらんごわ・株式会社カイクリエイツ）

What is the guardian spirit, the sense of life and daily practice of shamans?

Sarangowa

Keywords: Guardian spirit, sensation, empathy, multidimensional sense, multiplex sense, food, memory of life, pain, sacrifice sheep

Summary:

The cases of Chun Guag shaman(Buu) and Urana shaman featured in this paper are only a small part of their daily experience. The guardian spirit is invisible to the average person, but it is a sure thing for the shaman. The guardian spirit has various influences on Shaman's daily life. Therefore, Shaman's daily life is rich in multiple senses.

The guardian spirit educates Chun Guag about personality growth and moral, the guardian spirit is educating her children. Chun Guag shaman sympathizes with the guardian spirit, solves people's worries, and prays for them.

When the guardian spirit wants to eat foods he had eaten during his lifetime, Chun Guag also wants to eat that food. Moreover, I want to eat so much that I can't help it. Chun Guag eats it as much as possible. Chun Guag explains that eating in this way is a memorial service and love for the guardian spirit. The guardian spirit is not the real purpose of eating the foods that he had eaten during his lifetime through the mouth of Chun Guag, but the education of Chun Guag. In other words, we are educating people to cherish today's life. Taste is a device that creates empathy and is a catalyst for Chun Guag 's growth and action.

Chun Guag shaman and Urana shaman think of sheep from the standpoint of a sacrificial sheep, sympathize with the sacrificial sheep, give the sheep a personality, and are merciful as a human being. Shaman's repeated multidimensional senses and empathy lead to care that is close to the feelings of the other person. Shamans who live with the guardian spirit create a multidimensional care.